

伊勢湾の複合型藻類養殖技術開発事業

山田大貴・清水康弘・林茂幸

目的

伊勢湾では、様々な種類の漁業が営まれているが、漁場環境の悪化、魚価の下落や経営コストの上昇などによって漁業を取り巻く環境は厳しさを増しており、経営を安定させるためには、単一漁業種だけでなく複合的な経営（複数の漁業種類を営む）によって収入を確保していく「不漁リスク分散型漁業」への取組みが重要な課題となっている。

ヒトエグサ養殖は、伊勢湾で営まれている他の漁業（黒ノリ養殖業・機船船びき網漁業・小型機船底びき網漁業）に比べて比較的、設備投資や加工経費を安価に抑えることができる（陸上加工設備は黒ノリ養殖の約 1/4 程度の初期投資で済む）。そのため、ヒトエグサ養殖と他の漁業との複合的な経営を行うことで不漁リスクの分散が図れると考えられる。

本事業では、伊勢湾においてヒトエグサ養殖の主な生産地である松阪地区以外の海域でのヒトエグサ養殖適地の探索および当該地区でのヒトエグサ養殖を導入した場合の経営分析などを行う。

方法

1 モデル地区の設定とヒトエグサ養殖試験

ヒトエグサ試験養殖のモデル地区として桑名地区と香良洲地区を選定した。桑名地区では、主に黒ノリ養殖業、小型機船底びき網漁業が営まれており、香良洲地区では、主に機船船びき網漁業と小型機船底びき網漁業が営まれている。桑名地区においては、養殖試験に併せて試験網に水温ロガー（Onset 社）を設置し、連続観測を実施した。香良洲地区においては育苗期から当該地区での養殖の可能性について試験を実施した。

桑名地区で養殖試験に用いた種網は、天然採苗された後、葉長数 cm まで育苗された鳥羽市産 4 枚を用いた。香良洲地区については育苗前の種網を用いた。（桑名地区：平成 29 年 11 月 21 日試験開始、香良洲地区：10 月 2 日試験開始）。その後、生育状況を生産者および地区担当普及指導員と確認した。

2 モデル地区における経営分析

養殖試験で生産した製品の評価は、あおのり共販の共販結果を使用した。また、養殖に必要な経費については養殖試験参加者から聞き取りを行った。

結果と考察

1 モデル地区の設定とヒトエグサ養殖試験

1) 桑名地区

養殖試験開始後、1 月までに 3cm~5cm 程度まで伸長が確認されたものの、それ以上の伸長はみられず摘採に至らなかった。この原因として、水温調査結果から、1 日の間に最高水温（気温）と最低水温（気温）の間に最大約 20℃、平均 10℃の温度差が認められていたことから、木曾三川が漁場近傍に存在する桑名地区では、温度や塩分の変動が他の海域よりも大きいため、ヒトエグサが漁場環境に適応できず伸長がみられなかったと考えられた。また、試験漁場の潮流が速く、ヒトエグサ養殖を行う環境として不適であった可能性も推察された。

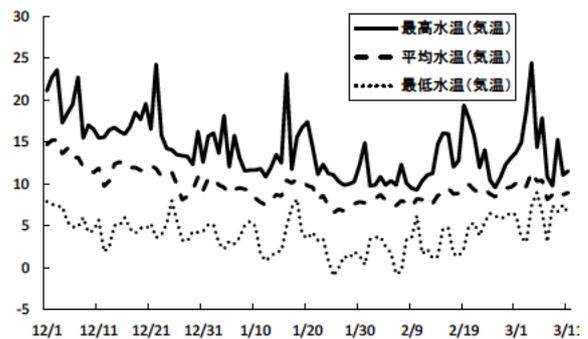


図 1. 桑名地区のヒトエグサ漁場の水温、気温

2) 津市香良洲地区

香良洲地区では、育苗から目立った障害もなく順調に生育し、摘採は 1 月下旬以降に行われた。生産された製品について、青さのり共販で入札が行われた結果、最高単価 9,990 円/kg、平均単価 5,571 円/kg（県内平均 3,571 円/kg）と高い評価を得た。この結果から、香良洲地区においては、育苗からヒトエグサ養殖が可能であり、高品質な製品の生産が可能であることが分かった。

2 モデル地区における経営分析

今漁期において、香良洲地区における収穫量は乾燥重量で約 2.5kg/網（1 網の大きさ 18m×1.2m）であり、この数量と香良洲地区の平均単価を用いて費用対効果を検証したところ、約 900 枚以上の規模であれば収益が見込めると推計された。